

国語

→ 低学年 | 自作の詩・童話

小学校教諭の自作の詩や童話で、 児童の学習意欲を高めよう

1. まずは音読で味わおう

子どもは、問題文の中から答えを見つける活動を「作業」と捉えがちだ。もっと内容に興味をもち、「知りたい」という気持ちを育てたい。

まずは、音読で文章を味わう。音読が苦手な子には、群読をお勧めする。しかも初めは短い詩がいい。「素読」「丸読み」「たけのこ読み」など、様々な読み方をすれば、児童はゲーム感覚で楽しく音読できる。

そして、教材を手作りすると、更に効果的だ。先生の作品を、教材にしてしまうのだ。

2. 主人公の気持ちを考えよう

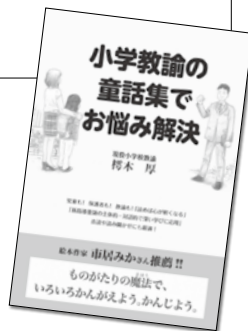
今回は「おてつだい」という児童作品を教材にした。実は、これは私が小学1年生のときに書いた詩だ。私が2年生になった年に、1年生用の道徳の副教材に収録された。後に、拙著「小学教諭の童話集でお悩み解決」(浪速社)にも収録した。

「なんで ぼくばかり させるの。」
と いうと、おかあさんは、
ミシンの てを やすめて
「おかあさんは、いそがしいのよ。」
と いいました。
ぼくは、おかあさんを じっと見ました。
そのとき、おにいちゃんが かえって きたので
「しめた。」 と おもって
そとへ はしって きました。

▲「おてつだい」(一部抜粋)



▲自作のイラスト。教師の自作のイラストも児童を引きつける要素となる。



さて音読の後は、作者の気持ちを読み取る活動を実施する。子どもに「ぼく」の気持ちを予想させると、「嫌な気持ち」「腹が立っている」などと発言する。否定的な意見しか出ない中で、私は違った考えを引き出そうとする。

3. 作者に聞いてみよう

作家の遠藤周作先生は、かつて「国語の読解なんて怪しいものだ。私の考えとは違う意見を、答えとして書いてあった」といった内容の発言をされていた。私は「なるほど」と唸ってしまった。

翻って今回の「おてつだい」で言うと、作者である私ならどんな質問にも答えられる。実は「普段は兄を頼りにしている」、「手伝いに関しては兄に優越感を持っている」という気持ちもあったのだ。子どもたちは「そんなことまでは文章から読み取れない」と感じる一方で、「作者が言うのだから間違いない」とも考える。これをきっかけに、読解問題に興味をもつ子も多い。実際に、「他にも問題を出して」というリクエストもあった。

4. おわりに

今回は指導者自身の作品を使ったが、「先生が感動した作品」や「子どもに人気のある名作」などでも同様の効果が期待できる。また家庭内で保護者が読み聞かせをしたり、興味を持った本を勧めたりすることで、さらに読解力が向上する。こういった取り組みによって、子どもたちは読書が好きになり、国語科そのものが好きになっていくのだ。

力説したいのは、「先生が真剣に考えて用意したものは、魅力的で学習意欲が高まる教材になる」ということだ。